

# 天皇杯受賞

里に宿る「歴史と伝説の魂」が織りなす進取の営農システムと農村文化の継承・発展

受賞者 じ とく ち く かん きょう ほ ぜん かい 自得地区環境保全会  
あ お も り け ん ひ ろ さ き し  
(青森県弘前市)

## ■ 地域の沿革と概要

弘前市は、青森県の南西部、津軽平野の南部に位置し、西には岩木山、南には世界遺産の白神山地が秋田県にまたがって連なっている。総面積は524.12km<sup>2</sup>、総人口179,307人（平成26年6月1日現在）で津軽地方の中心的な都市となっている。

気候は、夏が短く冬が長い日本海型気候に属しているが、三方を山に囲まれているため盆地のような内陸型に近く、平均気温10.2℃、最大積雪深は81cmと、日本有数の豪雪地帯青森県にあっては比較的温暖で恵まれた気候である。

県内最大の一級河川岩木川が市内を緩やかに北流しており、その流域の肥沃で広大な津軽平野は水田地帯となっている。平野に連なる丘陵地帯は、青森県の基幹作物であるりんごの生産が盛んであり、全国のりんご栽培面積の5割を占める青森県内において、その4割のシェアを誇る日本一のりんご産地となっている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

自得地区環境保全会が活動している鬼檜おになら地域は、弘前市の北部、岩木山の裾野に位置しており、海拔100m前後の標高の高い傾斜地ではりんご生産、平坦地では水田農業が営まれ、りんごと水稲の複合経営を主体とする農業地帯である。鬼檜地域の総世帯数は551戸（うち販売農家数336戸（2010年農林業センサス））で、その全てが自得地区環境保全会の会員である。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	10.5%
	総世帯数 70,142戸
	総農家数 7,397戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 2,168戸
	1種兼業農家 2,215戸
	2種兼業農家 2,155戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 52,412ha
	耕地面積 14,750ha
	田 4,650ha
	畑 10,100ha
	耕地率 28.1%
	農家一戸当たり耕地面積 2.0ha

※H22弘前市の数値

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 歴史の継承

鬼檜地域は、文化10年(1813年)に勃発した津軽藩最大の百姓一揆を率いた「藤田民次郎」の出生地である。民次郎は、凶作と重税に苦しむ農民を救うために藩主へ強訴し、一揆の首謀者として一人罪を背負い、22歳の若さで処刑されるも、この一揆により、津軽藩による救出米の配給や年貢の減免などが講じられ、困窮した民衆に生活の安定をもたらした。以降、地域では、「義民・藤田民次郎」の功績を顕彰する取組が連続となされ、「大衆のためには、一身を捧げて、敢えて悔いなし」とする民次郎の精神の伝承が、地域の歴史的背景となり、教育や農業振興、むらづくり活動が熱心に取り組まれる素地となっている。

また、地域には、農業と関わりの深い「鬼伝説」が残されている。昔、米作りにとって大切な水利の悪さに悩んでいた村人を助けるため、大人(鬼神)が一晚で水路(鬼神堰)を作ったというもので、この堰は、奈良寛ため池を水源として現在も地域の水田を潤しており、鬼神の使用した鍬や蓑笠を納めた「鬼神社」には、鬼の好物とも言われている「にんにく」を奉納している。民次郎は、一揆の当日、鬼神社に成功を祈願したとも伝えられている。

なお、地域では、「鬼は良いもの」として、節分には豆を蒔かず、端午の節句には菖蒲を軒に挿さない風習が残っている。

#### イ 地域の結束

明治9年に「鬼沢小学校」が開校して以来、途中5年間を除いて鬼檜地域の小学校は1学区であり、現在も「弘前市立自得小学校」として地域における教育の拠点となっている。地域住民は、子供の頃から結び付きが強く、自治会の地域活動においても、強い結束力の下で一体的に取り組んでいる。

#### ウ 地域の牽引役

鬼檜地域は、農業が主要産業であり、水田農業については、昭和46年から48年にかけて実施された第2次構造改善事業による区画整理を契機に、昭和47年4月に設立された「農事組合法人鬼檜営農組合」(以下「営農組合」という。)が中心となって展開している。営農組合の設立目的は、水稲作業を一手に引き受けることで、田植機やコンバイン等の機械化一貫体系による生産コストの低減及び省力化を図るとともに、同組合に水稲作業を委託することで、組合員がりんご生産に労働力を集中させ、りんごの規模拡大や高品質生産に専念できる産地体制を整えるというものである。河川改修の遅れにより半湿田状態が続き、作業効率が上がらず組合員が脱退するという課題もあったが、平成10年から平成19年にかけて、1haを標準区画とするほ場整備事業が実施されたことで、水田の大区画化と乾田化が図られ、水稲の生産性が向上した。

## エ 「自得水土里保全隊」の設立

水田農業において重要な水路やため池の維持管理は、営農組合や農業者の共同活動で支えられてきたが、一方では、高齢化や担い手不足等の進行により、管理水準の低下が課題として浮上してきた。そのような中、平成18年に「農地・水・農村環境保全向上活動支援実験事業」のモデル地区として鬼檜地域が指定されたため、鬼沢檜木土地改良区（以下「改良区」という。）を中心に、農業者だけでなく地域住民や自治会、関係団体等が幅広く参加する共同活動組織の設立へ動き出すこととなった。

そして、町会や関係団体を交えて、水路やため池の保全、将来の姿、共同活動の内容について話し合いを重ね、地域の農業者・非農業者431名と19団体を構成員とする「自得水土里保全隊」を、平成18年3月に設立した。自得水土里保全隊の活動目的は、農地・農業用水等の資源や環境の保全と質的向上を図るものであり、平成18年度は、関係団体の参加によるグループ討議やワークショップを行い、関係者の役割を確認し合いながら、今後の活動内容を定めた。

## オ 「自得水土里保全隊」から「自得地区環境保全会」へ

平成19年度から農地・水・環境保全向上対策が本格実施されたことを受けて、自得水土里保全隊による共同活動を本格的にスタートさせた。

平成24年度から第二期目である農地・水保全管理支払交付金となったことを契機に、農村環境全体を保全するという意味を込めて「自得地区環境保全会」（以下「保全会」という。）と名称変更し、継続的な共同活動を展開している。



写真1 自得地区環境保全会の皆さん

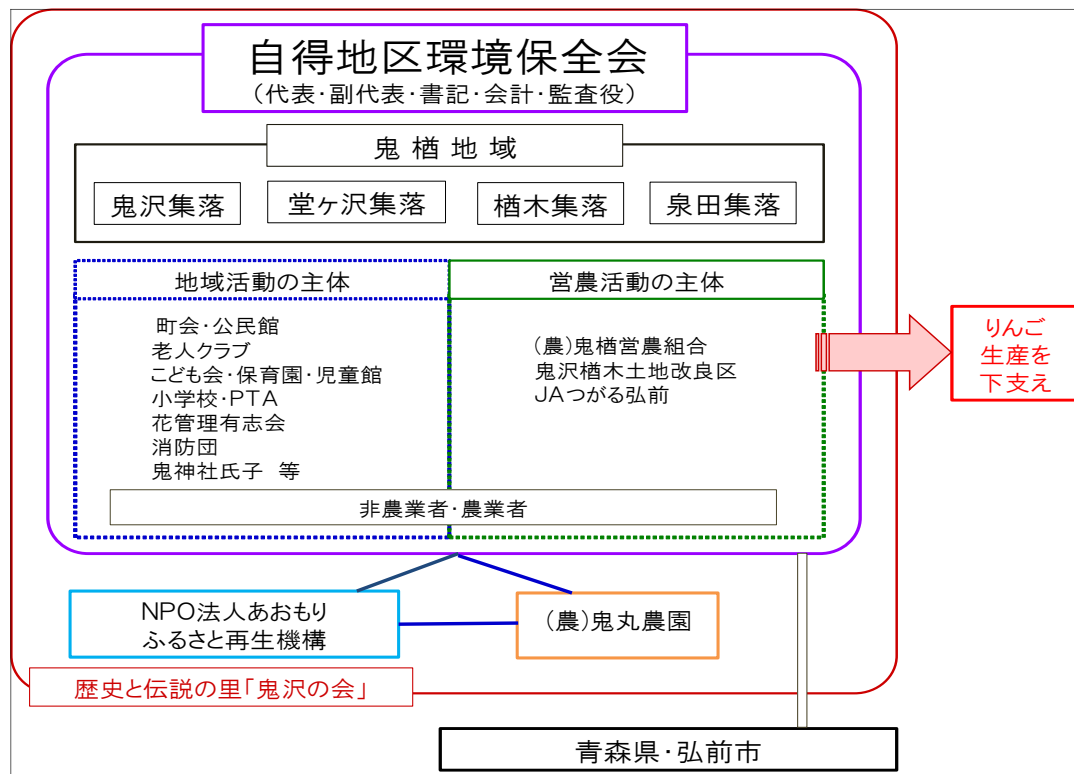
## (2) むらづくりの推進体制

保全会は、地域住民である農業者252名（営農組合含む）、非農業者351名の合計603名に加えて、自得小学校、こども会、公民館、老人クラブ、消防団など22団体で組織している（平成26年5月現在）。

当保全会による基本的な活動内容は、農業用施設（農用地・水路・農道・ため池）の保全管理に加え、水路沿いの花の植栽やその周辺における景観形成、自得小学校と連携したお米学習田による食育活動である。

「明るく元気であずましい（津軽の方言：心地よい）まちづくり」という目標に向けて、地域住民や関係団体が相互に信頼し合い、連携しながら主体的なむらづくりの取組を進めている。

第2図 むらづくり推進体制図



#### ア 鬼沢楢木土地改良区

地域の農業水利施設を管理しており、保全会の事務局を担当している。営農組合が設立されてからは、同組合と一体となって、耕作放棄地の発生を未然に防ぐため農地集積にも努めている。

#### イ 農事組合法人鬼楯営農組合

地域の水田農業を一手に担い、保全会と連携して営農活動分野の取組を進めている。昭和47年に設立してから、経営の継承もスムーズに行われており、県内外からの視察も多数受け入れている。

#### ウ 鬼沢公民館

教育や地域コミュニティ、福祉などの活動拠点であるとともに、地域の文化活動の中心的な存在であり、弘前市の指定無形民俗文化財である「鬼沢のハダカ参り」や、「鬼神社の七日堂祭」の保存団体（いずれも平成14年3月に指定）として活動している。

また、平成25年7月には、藤田民次郎の200回忌法要を執り行ってい

る。

## エ 鬼沢花管理有志会

地域の女性46名で構成され、花の植栽活動の中心メンバーである。地域行事のハダカ参りやJA夏祭りでは、お餅や郷土料理「けの汁」の振る舞いなどを行うほか、料理教室や食品加工施設の視察研修など精力的に活動しており、地域の元気の源となっている。

## オ 特定非営利活動法人あおもりふるさと再生機構

特定非営利活動法人あおもりふるさと再生機構（以下「あおもりふるさと再生機構」という。）は、青森県内の農山漁村の活性化支援を目的とし、平成21年7月に設立された。保全会とは、平成24年度に「鬼沢まるごとMap」の作成、平成25年度からは、津軽ふるさと創成劇「鬼と民次郎」の上演や、遊休農地を活用した農作業体験実施等の活動を連携して進めている。

その他にも、保全会の構成員である、JAつがる弘前、小学校PTAや、連携して活動を展開している農事組合法人「鬼丸農園<sup>おにまる</sup>」、保全会を中心メンバーとして結成された、歴史と伝説の里「鬼沢の会」等が、むらづくりの取組を進めている。

## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

鬼檜地域では、既に40年以上前から地域農業やむらづくりの取組が始まり、その後、歴史研究、文化継承、地域環境整備の各種活動が多層的に行われており、平成18年から始まった保全会の活動は、むらづくりとしての取組を、統合的かつ連携して行う契機となったものである。

地域農業との関わりが深い「鬼伝説」や「義民・藤田民次郎」にまつわる伝説を農村生活の伝承すべき文化的資源として継承し、農業生産、環境保全活動、食育活動、文化・交流活動等と融合させ、地域一体となって地域資源を活用した農村の活性化につなげて活動している。

### 2. 農業生産面における特徴

保全会が設立され、地域の関係者が一体となって水路やため池の保全などの共同活動が展開されたことにより、営農組合を中心とする地域ぐるみの水田農業経営が一層安定し、基幹作物であるりんごの生産振興にもつながっている。



写真2 「黄金色の水田」と「ひろさきふじ」

#### (1) 鬼檜地域の農業活動を下支え

昭和47年4月に設立された営農組合が中

心となって、水田作業の共同化による生産コストの低減及び省力化が進められることで、りんごの生産に農業者が労働力を集中させることが可能となった。

## ア 水田農業生産の向上

平成10年から19年まで、1 haを標準区画とするほ場整備事業が実施されたことにより、水田の大区画化と乾田化が図られ、大型機械の導入効果が高まり、大豆や小麦といった転作作物の大規模で効率的な作付けが可能となった。平成10年からのラジコンヘリコプターによる水稻の航空防除の実施や平成14年からのブロックローテーションによる大豆の集団転作の実施、平成15年からの大豆・小麦の2年3作体系での転作などにより、米の10a当たりの生産費<sup>※</sup>は、県平均や東北平均と比較しても低コストを実現している。

※平成24年産米の10a当たりの生産費

鬼檜営農組合	88,800円／10a	(独自に算出)
青森県	109,779円／10a	} (農林水産省農業経営統計調査 平成24年産米の生産費(費用合計)から)
東北	109,514円／10a	
全国	121,721円／10a	

## イ りんご生産の向上

鬼檜地域のりんご生産振興における優れた取組として、「ひろさきふじ」による早生系<sup>わせ</sup>ふじのブランド確立があげられる。「ひろさきふじ」は、昭和59年に当地域<sup>おおわにかつしろ</sup>の大鱈勝四郎氏が発見し、平成8年の初出荷で1箱(10kg)28,300円の高価格で取引され、一躍脚光を浴びた品種である。所得向上につながる有望品種であったことから、平成8年に地域のりんご生産者を中心に設立した「ひろさきふじ普及会」が、弘前市農協(現つがる弘前農協)の協力の下、一般的な流通とは異なった首都圏の高級果物専門店をターゲットとした販売戦略を検討し、生産、流通、販売の一貫体制を整えたことで、消費者の獲得に成功している。特に着色と食味の良い上位等級品を「夢ひかり」(平成11年に登録商標取得)のブランドで出荷したり、「ひろさきふじ」の出荷解禁日を「ひろさきふじの日」としたりするなど、地域ブランド戦略の先駆けとなる取組によって栽培面積を拡大させてきた。

また、「公益財団法人青森県りんご協会」が開催する「青森県りんご産業基幹青年養成事業研修」へ、鬼檜地域のりんご生産者が多数参加しており、地域のりんご生産者組織の中核的役割を果たす青年が多数育成されている。

りんごと水稻の複合経営を中心とする鬼檜地域において、保全会が取り組む共同活動は、営農組合を中心とした水田農業経営を一層安定させるとともに、鬼檜地域のりんご産業の振興にも寄与している。

## (2) 農地の利用集積、耕作放棄地の解消と発生防止

営農組合は、改良区と連携し、農業者の高齢化や機械の老朽化により水田営農が困難な者の水田作業等を積極的に引き受けることで、耕作放棄地の発生防止に貢献している。平成19年に県内初の特定農業法人となったことで、組合員以外の農地も積極的に集積することが可能となり、名実ともに鬼檜地域の水田農業を担うこととなった。平成22年には農業機械メーカーと連携した耕作放棄地の再生にも取り組んでいる。



写真3  
耕作放棄地の再生

## (3) 地域の雇用創出と地産地消

営農組合は、鬼檜地域の水田農業を守るだけでなく、経営改善を通じた雇用創出や地産地消にも貢献している。作業員の通年雇用と水稻育苗ハウスの有効利用を図るため、平成23年度から夏期のミニトマト栽培、冬期のアスパラガス伏せ込み栽培に取り組み、地域住民4名を季節雇用（4月～12月）しているほか、メインの水稻作業では、地域の若者3名を雇い入れ、オペレーターの世代交代をスムーズに行っている。

また、営農組合で作付けしている小麦を、平成20年からパン用の品種「ゆきちから」に切り替え、その全量（26t・平成24年度）を公益財団法人青森県学校給食会を通じて、弘前市や近隣市町村の小中学校に供給している。

## 3. 生活・環境整備面における特徴

保全会による共同活動によって、町会等が中心となって行っている清掃活動等が、鬼檜地域全体の取組へと拡大している。また、「鬼伝説」や「義民・藤田民次郎」といった地域資源に注目し、積極的に活用することで、世代を超えるコミュニティ活動が展開され、地域の絆を強くしている。

### (1) 共同活動による地域一体感の醸成

保全会では、「花のある、心安らぐ小川、ゴミのない町」をキャッチフレーズに、地域一体となって環境改善に取り組んでいる。これにより、各町会等が個別に取り組んでいる清掃活動等においても地域住民が顔を合わせる機会が増え、相互交流の促進による地域の活性化が図られている。

特に、年に一度会員総出の22班体制で行う地域内全域の草刈りは、地域住民の連帯感を作り出し、地域農業への関心を高めており、また、この活動における会員の対話等をきっかけに、地域内の耕作放棄が危惧される農地を把握し、事前に対処するといった効果も出ている。

## (2) 花の植栽による景観整備

平成19年度から、鬼沢花管理有志会が老人クラブや保育園・児童館の園児や児童らとともに、地域の2か所に花壇を作り、花の植栽・補植と花壇周辺の草取りや肥料散布等を行っている。

## (3) 「お米学習田」を通じた食育活動

平成18年度から、休耕田を活用して自得小学校の全校児童とPTAを対象に「お米学習田」を実施している。営農組合やJAの指導の下、育苗の見学から田植え、稲刈り、脱穀といった年間を通じた農作業体験や、学習田活動の発表会、収穫した餅米で作ったお餅を振る舞う交流会も行っている。また、「お米学習田」は、集落景観への配慮と取組内容の周知も考えて、比較的交通量の多い道路沿いの休耕田を選び、看板も設置している。



写真4 お米学習田による食育活動

このような継続した取組が地域に認知され、将来の担い手である子供たちやその父母に対して、地域の基幹産業である農業の大切さや楽しさを伝える機会となっているほか、農業の発展により形成されてきた、地域の歴史や文化を継承する下地としての成果もあげている。

## (4) ハダカ参りによる歴史の伝承と交流

毎年、旧暦1月1日に、「鬼神社」境内で締め込み姿の男性が氷水に浸かって禊ぎをし、五穀豊穰を祈願するハダカ参りが行われている。ハダカ参りは350年以上も前から続く伝統行事であったが、人口減少に伴い参加者が減少し、その存続が危ぶまれていた。平成10年、当時の鬼沢公民館館長が、地域外からの参加者も受け入れて、ハダカ参りを伝承していくことを呼びかけたところ、今では、地域住民のほかに地域外や外国人の参加者も多数見られるようになった。ハダカ参りが終わった後には、地域住民と参加者、見物客で交流会も行っている。



写真5 ハダカ参り

## (5) 地域資源を活かした都市農村交流へ

保全会は、あおもりふるさと再生機構からの声かけを契機に、都市農村交流を視野に入れた地域資源に着目した活動を展開している。中心テーマを、「鬼伝説」と「義民・藤田民次郎」とし、平成24年度の「鬼沢まるごとMap」の作成、平成25年度の津軽ふるさと創成劇「鬼と民次郎」等を



通じて、「鬼伝説」や「義民・藤田民次郎」を語り継ぎつつ、地域外との交流にも活用することで、住民の郷土愛を育みながら地域振興を図っている。

#### ア 「鬼沢まるごとMap」で地域資源の再認識

平成24年度、保全会の主要メンバーに弘前大学の学生たちも参加して結成された「おにざわ未来を語る会」（現「歴史と伝説の里 鬼沢の会」）は、地域内を調査して写真やデータを集め、地域の魅力を住民に伝えて後世に残すため、何を取り上げればよいか話し合いを重ねた。

完成した「鬼沢まるごとMap」は、「鬼伝説」や「義民・藤田民次郎」に関連する史跡等の地域資源を中心に構成し、ため池や水路等の農業施設を加えることで、地域形成に寄与してきた農業への理解を深める内容となっている。

マップ作りに取り組んだことで、何気なく目にしてきた地域資源を再認識し、地域住民が手にとって見える形にしたことが、次のステップへの起爆剤ともなっている。

#### イ 津軽ふるさと創成劇「鬼と民次郎」で鬼櫓の魅力を地域内外に発信

「義民・藤田民次郎」の没後200年となる平成25年度、今後の都市農村交流の展開も視野に入れて、「鬼伝説」と「義民・藤田民次郎」をモチーフとした津軽ふるさと創成劇「鬼と民次郎」を制作・公演した。劇の作・演出は、青森市在住の劇作家・演出家の畑澤聖悟氏に依頼し、出演者は地域を中心に広く公募した。数か月にわたる稽古を重ね、平成26年3月23日、自得小学校体育館で上演された「鬼と民次郎」は、同地域に伝わる弘前市無形民俗文化財「鬼沢獅子踊」を中心に、「鬼伝説」や「義民・藤田民次郎」の物語を挟み込む形で構成され、来場者数は約280人に及び、立ち見が出るほどの盛況ぶりであった。8月23日、24日には再演も行っている。



写真6 津軽ふるさと創成劇「鬼と民次郎」

津軽ふるさと創成劇「鬼と民次郎」を通じて、地域資源を核にした世代を超えるコミュニティ活動が強化されるとともに、都市農村交流を促進させる魅力的なコンテンツが形成された。

これらが契機となり、藤田民次郎の遺徳を再評価し、地域活性化につなげる機運が高まり、昭和30年代初めに制作され、近年は上映されなくなっていた藤田民次郎のスライド上映会を平成26年5月17日に復活・開催することになった。

また、旅行代理店やイベント会社を対象とした地域散策会（地域資源の散策、にんにくの作付体験、郷土料理の試食）を平成25年10月に開催

し、グリーン・ツーリズムに取り組むに当たっての課題の洗い出しも行い、平成26年6月及び、10月には、あおもりふるさと再生機構と歴史と伝説の里「鬼沢の会」の共催によるバスツアーを開催し、県内各地からのツアー客との交流を図っている。